平成２９年度

社会情報学部小論文問題

（推薦入試）

注意事項

1　試験開始の合図があるまでは、この冊子を開いてはいけません。

2　問題冊子と解答用紙は以下のとおりです。
（1）　問題冊子・・・・・・・・５ページ
（2）　解答用紙・・・・・・・・２枚
（3）　下書用紙・・・・・・・・２枚

3　問題冊子及び解答用紙に、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。

4　解答は、指定の解答用紙に記入してください。

5　解答用紙の所定の欄に氏名と受験番号を必ず記入してください。

6　試験時間中、解答した解答用紙を脇に置く場合は、不正行為防止のため解答用紙を裏返して置いてください。

7　解答用紙はすべて回収します。問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで以下の問いに答えなさい。

ほんの数年で、スマホは驚異的なペースで普及した。

電車に乗っても、一つの車両の中で誰もスマホをいじっていない光景を目にすることはないのではないか。目の前の列の全員がスマホを手にしていることも珍しくない。

一昔前ならば、新聞や文庫本を手にする人がもっといたと思うのだが、明らかにそういう人は減っている。

…（略）…私は iPhone は現時点で完璧に近い情報ツールだと考えている。だから普段も愛用しているし、スマホで情報収集をしている人を否定的に論じられる立場にはいない。

ただ、それでもちょっと気になるのは、本当にそこまで見続ける必然性があるのだろうか、という点である。自身の定めたルール――たとえば通勤中には〇〇新聞のサイトをチェックする、といったこと――に従って、スマホを見ているのならば問題ない。

しかし、惰性でいじっていて、「情報を摂取したつもり」になっているだけ、ということはないだろうか。本来、別にニュースをチェックしなくてもいい時間帯にもかかわらず、何となく手持無沙汰で見てしまう。ついついＬＩＮＥやツイッターを見てしまう。

多くの場合、それで得た情報は、すでに見たものであったり、どうでもいいものであったりするのではないか。そういえば、先日テレビを見ていたら、ある有名な芸能人が、「最近は問題なく電車に乗れるんですよ」と言っていた。「皆が下を向いて周囲を見ないので、昔のように気付かれない」と。笑えた。

芸能人に気付くべきかどうかはさておくにしても、無駄にスマホを相手にしているくらいならば、電車内を観察して情報を得たほうがいいのではないか、という気がする。街の中と同様に、電車内もまた情報の宝庫である。

夏にネクタイのサラリーマンが減ってきたことから、クールビズが完全に定着してきたことを感じることもできる。

若い女性のメイクが変わってきたことで、新しい流行を見てとることもできるだろう。

赤ちゃんを連れた母親が、いつの頃からか「おんぶひも」の代わりに「だっこひも」を使うようになったことも、観察していれば一目瞭然だ。あのひもは「エルゴベビー」といって、若い子育て世代にとっては必需品（しかし、それ以外の世代の者はまったく知らないもの）だそうだ。

もちろん、雑誌の中吊り広告などを見ることで、その時、どんなニュースが「売れ線」だと考えられているかがわかる。それだけではなく、車内の中吊りに「自社広告」が多い路線ならば、「この路線は広告が集まりにくいのだな」ということが推察できる。

さまざまな世代、性別の人を遠慮なく（限度はあるにせよ）観察できる機会はさほど多くないのではないか。そう考えると、「人間ウォッチング」ができる電車もまた、貴重な情報収集の場である。

繰り返すが、「電車内でスマホを見ること」が貴重な情報収集の時間である、と決めているのならば結構な話である。

しかし、漫然といじっているのだとすれば、もったいないことをしている可能性があるのではないだろうか。

目に入ってくる映像の全て、肌に感じる空気や風などの全て、耳に聞こえてくる小鳥のさえずりから街の騒音、口に入るもの——全ては、実は我々にとって非常に重要な“情報”となりえる。

静寂だって情報だ。いつもは賑やかな街が異常に静かだったら、何かおかしな事が起きていると思わないといけない。イヤホンをしてスマホをいじりながら歩いていては、異変に気付くことはできない。

情報のうち、メディアを介して得るのはごく一部に過ぎない。そんなことは誰もがわかっているはずだ。

しかし、メディアから大量の情報を摂取していくうちに、何となく情報というものを「メディアが運んでくる物」だと捉えてしまうようになりがちだ。そういう「情報」は我々を取り巻く全情報のごく一部にすぎない。それを忘れないようにするという意味でも、毎日「メディアが運んでこない情報」を取り入れる癖をつけたほうがいいだろう。

よく言われる話だが、ラクダと生きる民族は、ラクダに関する様々なる言語を持つ。言語を持つということは、ラクダに関する情報が分化しているということだ。たとえば、普段ラクダを使わない日本人には、「ひとこぶラクダ」と「ふたこぶラクダ」の違いくらいしか分からないが、彼らはその呼び名だけで数百通り、一説には数千もの言葉を持つのだという。それは彼らにとっては極めて有用な情報であるが、私たちにとってはほとんど無意味な情報でもある。

もちろん、何が必要な情報となるかは、その人の仕事、住む場所、環境にも左右される。人がどこに住むか、何を手段として生きているかによって変わる。

何が自分にとってのラクダなのか。そのことを常に私たちは意識しておく必要がある。

そればかりは、他人に聞いてもわからない。

…（中略）…

情報を制限するにあたって、ネット情報においてはテレビ同様、いやそれ以上に「繰り返し」には注意したほうがいい。

テレビでは同じ映像の使い回しや新聞記事の引用が多いが、ネットはその比ではない。情報のソースは同じなのに、引用箇所を変えたり、体裁を少し変えた程度の記事が無限に増殖している。ＰＣやスマホにはこうした情報がひっきりなしに流れてくる。見出しにつられてつい読んでしまったが、何の新しい情報もなかった、なんて経験は誰にでもあるはずだ。

ネットの世界では、多くの人が関心を持つ情報ほど拡散し、様々な形に変えて発信されていく。マスコミやネットサイトだけでなく、一般ユーザーの手によって伝えられ、コメントされ、転送される。なにせ、世界には数え切れないほどのマスコミ各社がある。

受け取る我々の側にも問題がある。もはや繰り返し情報が流されるのを当たり前だと思っている。「聞き飽きた」「見飽きた」と思いながらも、関心事についてはいつの間にか目で追ってしまう。情報を得ているだけで満足してしまい、その無駄に気づかない人は多い。

テレビを見ながら何も考えずに、手元にあるポテトチップスを食べ続けているようなものだ。こうなると、肥満への道まっしぐらである。

ネットは情報量の観点から言っても際限がない。新聞のように紙面の制約も、テレビやラジオのような時間の限界もない。同様に、個人が持てる情報量も飛躍的に増えた。ハードディスクやクラウドの急速な普及によって、ネットの情報をほぼ無制限に保存できるようになった。

しかし、いくら情報量が増えたとしても、有意義な情報が増えたとは言い難い。いささか「水増し」の感は否めないのだ。

マスコミは同じような情報を繰り返し発信し、私たちは同じような情報を繰り返し見てつい記憶、保存してしまう。ネットの世界は、同じような情報が重層的に積み重なって膨大な規模になっているだけなのだ。ところが、その膨大さの割に、新しい情報は少ない。

ネットの情報を制限し、効率よく獲得するためには、まず情報のソースに直接アクセスし、重複するニュースは避けるように心がける。その意味でポータルサイトやＳＮＳから情報を得るのはあまりに効率が悪い。新聞社や通信社など、情報を自分たちで取材し発信しているメディアから情報を得るようにしたほうがいい。さらにその中でも、精度が高く、価値のあるメディアを厳選することだ。

「ヤフー・トピックスで済ませてはいけないの？」

そう思う人もいるかもしれない。ここで思い出していただきたいのが、新聞についての項で触れた「ニュースの配置」である(注)。ヤフーではトップページに、８本の記事の見出しが掲載されている。大体、上の２本が政治、経済や国際情勢に関するもの、その下の４本は事件、事故や街の話題などで、下の２本がスポーツや芸能、というのがスタンダードな並びである。

つまり、ここでは「金融緩和」「中一生殺害事件」「美しすぎる県議会議員」「ＡＫＢ総選挙」が等価で扱われている。これはこれでニュースの新しい提示方法であるし、だからこそ幅広い支持を得ているのだろう。また、思いもよらぬニュースに遭遇する可能性もあるから一概には否定しない。

しかし、有益なニュースを得るという点では効率がいいとは思えない。それよりは新聞などのサイトを見たほうが、本当に社会にとって重要なニュースを要領よく得る

ことができるだろう（ＡＫＢ４８こそが人生の最大関心事だ、という人がいることを私は否定しないし、結構なことであると思うことは申し添えておく）。

また、前述のとおり、ネットでは同じような情報に直面したら、パッと読むのを止めてしまったほうがいい。細かい点を追究したり、すでに知っていることを再確認したい気持ちは切り捨てる。時間の無駄だけでなく、頭のスペースも無駄になる。他の情報や多様な考えを受け付けなくなるからだ。

伊藤洋一『情報の強者』2016年　新潮新書

（設問の都合上、文章や表記を一部改めた箇所がある）

（注）著者は、新聞を読むときに紙面におけるニュースの配置を重視している旨を、本文とは別の箇所で述べている。

問１　著者は、下線部で「何が自分にとってのラクダなのか。そのことを常に私たちは意識しておく必要がある」と主張しています。ここでの著者の主張内容を説明しなさい（400字程度）。

問２　著者の主張の全体をまとめたうえで、それに対する自分の考えを述べなさい（600字程度）。